

保育者養成短期大学における子育て支援イベントの 意義と可能性

—参加保護者・学生のアンケート分析から—

上村有平* 森下嘉昭

The Significance and Potential of Childcare Support Events at a Junior College for the Training of Childcarer: A Questionnaire Analysis of Parents and Students

UEMURA Yuhei MORISHITA Yoshiaki

1. 問題と目的

山口芸術短期大学保育学科では、例年、就学前の幼児を対象とした様々なイベントを企画・実施し、いずれも大盛況となっている（表1）。特に、本研究対象となる「あそびのひろば」は、2023年度に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行したことも後押しして、これまでの同イベントをリニューアルし、「芸短わくわく親子フェス 2023「あそびのひろば」」と題して7月に開催された（以下、あそびのひろば）。この「あそびのひろば」は、従来の幼児向け各種遊びコーナーとお店屋さんごっこ大会を融合した子育て支援イベントとなっている¹⁾。

表1 山口芸術短期大学保育学科における幼児向けイベントの例

名称	内容
あそびのひろば	各種遊びのコーナー
お店屋さんごっこ大会	学生による手作り商品のお店でお買い物ごっこ体験
子ども総合研究発表会	音楽表現、身体表現、劇表現、人形劇などの舞台発表

保育者養成の短期大学において、このような地域の子育て世帯の親子を対象としたイベントを実施する意義として2点指摘できる。1つめは、保育者をめざす学生にとって、子育て支援をふくめた貴重な実践的学びの機会になる点である。学生は短期大学2年間の教育課程を通して保育所や幼稚園で実習を経験するものの、子どもの保護者と実際的に関わる場面は極めて限られており、イベント内で保護者と関わる点において重要な教育的意義がある。特に子育て支援については、子ども・子育て支援新制度の施行（2015年）以降、保育・幼児教育においていっそう重要なものとして位置づけられており²⁾、その重要性は今後もさらに高まっていくと考えられる。もう1つの意義は、地域の子育て世帯の親子が参加できる子育て支援イベントとなる

* 頌栄短期大学

ため、「地域に開かれた大学」「地域とともにある大学」³⁾として、大学と地域との連携・協働につながっていく点である。

このように、保育者養成短期大学が地域の子育て世帯の親子を対象にしたイベントを実施することは、平松⁴⁾が指摘するように、保育者をめざす学生の実践的学びの場となるだけでなく、地域子育て支援の充実を求める社会的要請や大学の社会貢献のあり方への要請に応える上でも重要な意義がある。しかしながら、保育者養成短期大学における子育て支援や地域連携・協働を企図したイベントに関する研究は、現状では少ない。

そこで本研究では、次の2点を目的とする。

- (1) 参加した子どもの保護者を対象としたアンケートを分析し、保育者養成校が主催する子育て支援イベント（あそびのひろば）の意義や配慮すべき事項を明らかにする（調査1）。
- (2) 学生を対象としたアンケートを分析し、子育て支援イベント（あそびのひろば）が地域の子育て親子に果たす役割について、学生自身がどのように受け取っているのかを検討し、イベントの教育的意義を明らかにする（調査2）。

これによって、地域の子育て世帯親子のニーズに合ったイベント企画につながるだけでなく、地域の子育て支援機関としての保育者養成短期大学の存在意義や可能性を検討する上でも意義があると考えられる⁵⁾。

2. 調査1：参加保護者対象アンケート

(1) 方法

調査協力者 「芸短わくわく親子フェス 2023「あそびのひろば」」参加保護者 47名

調査時期 2023（令和5）年7月22日

調査内容 次の①～②について、自由記述で回答を求めた。

- ①全体を通してのお気づきやご感想（特におもしろかったコーナーなど）
- ②本学の日頃の教育活動についてのお気づきやご意見

(2) 倫理的配慮

イベントの受付において、参加保護者にアンケート目的および自由意思によって回答の判断ができることを口頭で説明して協力を仰ぎ、アンケート用紙を配布。退出時に回答の提出をもって同意を得たとした。

(3) 結果

参加保護者を対象にしたアンケートについて、頻出するワードや意味を抽出し、KJ法⁶⁾をもとに分類した。その結果、「ポジティブ感情」「子どもの反応」「子ども理解の深まり」「子育てのヒント」「環境構成」「学生の対応」「改善点・考慮点」の7つのカテゴリに分類され、代表的な記述としては次のようなものが挙げられる（下線は筆者による）。

1) ポジティブ感情

「楽しかった」「大喜び」「面白かった」といったポジティブ感情に関する記述である。

- ・全部楽しく、子どもたちも大喜びでした。
- ・よく考えてあって、子どもは大喜びでした

2) 子どもの反応

子どもの様子や反応が記述されたものである。このカテゴリでもポジティブ感情が多数記述されていた。

- ・投げたり転がしたりといった、身体を動かすものを楽しんでいました。

- ・子どもは射的や輪投げなどのゲームコーナーを楽しんでいました。
- ・新聞紙のプールは、ダイナミックで1番の笑顔でした。
- ・紙コップも、あれだけの量で遊べることは無いので、とても楽しそうだった。
- ・メダルやお土産をたくさんもらえて、子どもたちがすごく喜んでいました！
- ・ダイナミックなお絵描きコーナーをきっかけに、いろいろな遊びに興味をもって、時間いっぱいまで遊ばせてもらいました。

3) 子ども理解の深まり

前述の「子どもの反応」にくわえて、保護者にとって子どもへの新しい発見や、これまでと違った視点が得られたことについて記述されたものである。

- ・子どもの集中力にびっくりしました。
- ・紙コップは1時間くらいやってみました！汗だけで、積み上げていって上にいくほどドキドキする気持ち、最後の1個を置くときの表情、完成したときの「めっちゃ嬉しい」という顔、こちらも嬉しくなりました。夢中になって遊べるってすごいことだなんて改めて感じました。

4) 子育てのヒント

家庭での子育てのヒントや応用の視点が得られたことが記述されたものである。

- ・子ども視点での遊び、創作、また日常的な道具でも、発想次第でとても楽しく遊び、学べることを教わりました。
- ・身近なもので遊びを作っていて、とても参考になりました。
- ・廃材を利用して作っていたところが、とても参考になりました。お家でも真似できそうです。
- ・子どもが楽しめる工夫たくさんで、そして制作物のクオリティも高く、大人も楽しめました。
- ・学生1人ひとりが、子どもたちに楽しんでもらえるように工夫しているのが伝わります。

5) 環境構成

環境構成に着目した記述である。

- ・メダルをくれるコーナーが多かったが、同じメダルを置いているところはなかったので良かった。
- ・水族館は、見た目の豪華さに驚いた。
- ・子どもが好きそうな色や形などたくさん用意してあり、興味津々に楽しそうに遊んでいました。
- ・アイス屋さんのシール貼りも、種類がたくさんあって良かった。
- ・すべて手作りで、子どもたちの好みそうなコーナーがたくさんあって、とても楽しむことができました。

6) 学生の対応

イベント当日の学生の対応に関わる記述である。

- ・輪投げコーナーの学生は、リアクションが良かったので、子どもも楽しそうだった。
- ・声かけやお手伝いなども、細かな部分まで配慮いただけて嬉しかったです。
- ・子ども3人連れての参加でしたが、学生さんが1人の子を見つけては近くにいてくれたので、長男も退屈することなく遊べました。
- ・学生の皆さん全員が、たくさん出迎えてくださったり、みんな笑顔で挨拶、気持ち良かった。
- ・どこに行ってもお姉さんたちが優しく接してくださり、とても嬉しそうだった。

- ・教育実習でお世話になっている方たちが、うちの子を覚えていてくださって嬉しかったです。

7) 改善点・考慮点

ここまでの1)～6)のカテゴリが、肯定的な内容であるのに対し、このカテゴリは改善点・考慮点に相当する。数としては以下の6件（アンケート全体の12.8%）であった。

- ・年に2～3回あってほしいです。
- ・お花屋さんは学生が作ってくれるけど、子どもも一緒に作れたら、なお楽しそうだった。
- ・赤ちゃん向けのコーナーがあると嬉しかった（あそべる）。
- ・ダンボールハウスの学生は、話しかけてくれないので、どうしたら良いか子どもも戸惑っていた。
- ・暑かった。
- ・暑かったのが気になりました。

(4) 考察

アンケート結果をふまえて、ここでは本研究の目的（1）保育者養成校が主催する子育て支援イベントの意義や配慮すべき事項に関わって、重要な点を4つ挙げたい。

1) ポジティブ感情の重要性

ポジティブ感情は、他の様々なカテゴリの記述に多数みられた。このことは、保護者の視点として、子ども向けのイベントに参加する上で、子どもにとって「楽しい」「うれしい」と思えるかが最も重要であることがうかがえる。それゆえ、子育て支援イベントを企画・実施する上で、親子がともに楽しめるイベントを企画することの重要性が、アンケートからも示唆された。

2) 保護者の子ども理解の深まりと子育てのヒント

「子ども理解の深まり」「子育てのヒント」の2カテゴリについては、他のカテゴリでは代表的な項目例を精選して挙げたのに対し、調査協力者47名中、「子ども理解の深まり」では3名(6.4%)、「子育てのヒント」では5名(10.6%)のみの記述であった。記述された数が少ない理由として、2点考えられる。1つめは、保護者にとっての主目的は子どもが楽しめるかどうかであり、子ども理解を深めたり子育てのヒントを得ようと参加しているわけではない点である。2つめは、アンケート内容が「全体を通してのお気づきやご感想」として、自由度の高いものであった点にある。そのため、保護者にとってアンケートに記入する際、子どもが楽しめたかどうかのポイントとなりやすいことが推察される。

一方で、本イベントが保護者にとって「子ども理解の深まり」や「子育てのヒント」につながる可能性が示唆された。このことは、親子が楽しめるイベントの中に、子育て支援につながる要素を意図的に入れ込むことで、イベントが持つ子育て支援の機能がより一層充実するものと考えられる。

3) 学生の教育活動としての意義

学生の教育活動としての意義に視点をうつすと、今回のような保護者へのアンケート結果は、学生にとっては活動の省察にくわえ、子ども・保護者理解、自己理解といった教育的な意義につながる点でも重要である。たとえば「子どもの反応」に関わる内容については、自分たちが準備した遊びに対する子どもの反応を詳細に知ることによって、子ども理解につなげることができる。また、保護者の「子ども理解の深まり」と「子育てのヒント」の内容から、保護者のもつ視点やニーズを知ることによって、保護者理解につながっていく。さらに「学生の対応」の内容からは、会場での学生の対応や関わりが、子どもや保護者にどう伝わったかが分かるため、自己理解にもつながるものとしてもとらえられる。このように学生が活動を省察し、子ども・保護者理解や自己理解を深

めてPDCA サイクルをまわすことで、保育者養成校が主催する子育て支援イベントのさらなる充実につながっていくと考えられる。

4) 改善点・考慮点からの示唆

改善点・考慮点のうち、「年に2～3回あってほしい」「子どもも一緒に作れたら、なお楽しそうだった」「赤ちゃん向けのコーナー」については、本イベントを肯定的に受けとめた上での意見である。特に赤ちゃん向けのコーナーについては、幼児向けイベントのために設置していなかったが、地域のニーズに応えるためにも今後検討していく必要がある。

「学生の対応」に関して多くの肯定的意見があった中で、1件のみ「ダンボールハウスの学生は、話しかけてくれないので、どうしたら良いか子どもも戸惑っていた」という意見があった。このたび対応した1年生は、入学後に保育を学び始めたばかりであり、「子どもの主体性」を重視した関わりにおいて、どこまで援助・介入するのか判断が難しいことが予想される。その結果、思いとしてはあるにもかかわらず、目に見える行動にうつせない状況も考えられる。あるいは学生の中には、自分から他者に積極的に関わることが難しいケースもある。こうした学生に対しては、会場にいる教員が全体把握と合わせて、適切な援助をしていくことが求められる。

「暑かった」という意見が2件(4.2%)あったが、本イベントが7月下旬に行われることは年度途中で急遽決定した経緯もあり、時期や会場については今後の課題となった。一方で、7月下旬という時期を鑑みれば、暑い中でも十分に楽しめるイベントとなっていたことがうかがえる。

3. 調査2：学生対象アンケート

(1) 方法

調査協力者 短期大学1年生75人中48人(回収率64%)

調査時期 2023(令和5)年9～10月

調査内容 「こういったイベントは、地域の子育て親子にとって、どんな意味があると思いますか?」に自由記述で回答を求めた。なお、アンケートではこの他にも「あなたがグループのなかで果たした役割とはどのような役割ですか」「準備の段階で工夫したことは何ですか」など7項目についても自由記述などで回答を求めたが⁷⁾、本研究では分析の対象外としている。

(2) 倫理的配慮

調査協力者には、アンケート目的および自由意思によって回答の判断ができること、回答の有無・内容と成績は一切関係がないことを口頭で説明してアンケート用紙を配布。回答の提出をもって同意を得たとした。

(3) 結果

学生を対象にしたアンケートについて、調査1と同様に頻出するワードや意味を抽出し、KJ法⁸⁾をもとに分類した。その結果、「子どもにとっての意義」「保護者にとっての意義」「親子にとっての意義」「地域交流の場」の4カテゴリに分類され、代表的な記述としては次のようなものが挙げられる(下線は筆者による)。

1) 子どもにとっての意義

このカテゴリは、子どもに関わる内容で、さらに2つの下位カテゴリ「遊びの広がり」「発達の意義」に分類された。

<遊びの広がり>

子どもの遊びが広がったり展開したりするといった内容である。

- ・子どもたちが段ボールや新聞紙での色々な遊び方・楽しみ方を知る事が出来たり、保護者

の方との楽しみ方を知る事が出来る。

- ・家で遊ぶことのないものや親がやろうと思わないこともできるので、子どもたち1人で遊ぶ時の遊びの発展にもつながると思った。
- ・身近な物が遊びに変わることを知り、遊びが広がる。

<発達の意義> ※ () 内は筆者

本カテゴリには、「社会的発達」「身体的発達」「認知的発達」の3領域にわたる記述が見られた。

- ・子どもの社会性を育てることができる。(社会的発達)
- ・色々な人と関わることで交流が広がり新しいつながりができて、人と関わる楽しさを知ることができる。(社会的発達)
- ・日頃と違う環境や見慣れない環境の中で、新しい出会いや人と関わることによって、子どもの心の発達に良い刺激を与えられると思う。(社会的発達、認知的発達)
- ・想像力等を育てることができる。(認知的発達)
- ・子どもたちが家とは違って全身を使って遊べる、頭を使うなど成長出来る場所だと思った。(身体的発達、認知的発達)
- ・交流の場にもなるし、子どもたちが家とは違って全身を使って遊べる、頭を使うなど成長出来る場所だと思った。(社会的発達、身体的発達、認知的発達)
- ・コミュニケーション力や家でも遊べる素材を見つけ出すことができる。(社会的発達、認知的発達)

2) 保護者にとっての意義

このカテゴリは保護者に関わる内容で、さらに4つの下位カテゴリ「子ども理解の深まり」「子育てへのヒント」「安心できる時間と空間」「相談できる場」が見られた。そのうち前者2カテゴリは、保護者対象アンケートの「子ども理解の深まり」「子育てへのヒント」に対応する内容である。

<子ども理解の深まり>

保護者にとって子どもへの新しい発見や、これまでと違った視点が得られたことについて記述されたものである。

- ・子どもがどんなことに興味があるのか、どんな遊びがあるかを保護者の方も知ることができる。
- ・親子で来ることで、身近な物でどれだけ子どもが楽しんでいるか見ることができる。
- ・普段、家では出来ない活動がたくさんあるので、子どもの見たことの無い姿を引き出せる。
- ・普段、家で見られない自分の子の姿や、仕事で忙しくてなかなか家族の時間が作れない保護者も多くいると思うので、自分の子の特技や成長を知る良い機会だと思う。
- ・子どもたちに、いつもと違う場所や環境で遊ばせる事でその子の興味のあることが分かったり、刺激を与えたりする事が出来ると思う。

<子育てのヒント>

家庭での子育てのヒントや応用の視点が得られることが記述されたものである。

- ・親御さんが、「うちの子がずっとこの遊びをしてて、この遊びが気に入ったみたいです」と言ってくださって、その子がどんな遊びに夢中になるか、年齢に合った遊びを知る事ができると思う。家でもやらせてみますとおっしゃっていたので、子育て中の方も学ぶ事ができる場だと思う。
- ・自宅で子どもと遊ぶときに、工作や遊びのバリエーションが増えて、家ですることが無い時にTVやゲームをする以外の遊びの手本となったと思う。
- ・家以外で他の人と遊ぶ子どもの姿を目の届く所から見たり、一緒に遊びに参加することで、「こういう遊びもあるのか」と新たに見つけられる。

<安心できる時間と空間>

保護者にとって安心や気分転換となる時間や空間が提供できるという内容である。

- ・いろいろな学生が見守りながら遊べるので、安心できる。
- ・普段なかなか家ではできない大がかりなものを、保護者の方が少し休憩しながら子どもたちが思う存分遊べる。
- ・親も子も普段関われない人と関わって、気分転換出来ると思う。

<相談できる場>

保護者にとって相談できる場になるという記述である。

- ・1人で子育てに悩んでいる人たちが相談しやすい場所をつくり、心の栄養にもなると思う。
- ・子育てで困っていたら先生に相談出来たり、工夫をしているので身近に感じることも多い。

3) 親子にとっての意義

このカテゴリは、子どもと保護者のいずれかではなく、親子をセットにした記述である。

- ・親子のコミュニケーションがとれる。
- ・親子の絆を深める
- ・子どもと遊びを通して楽しむことができ、親子関係もより良いものとなると思う。

4) 地域交流の場

地域の子ども同士、保護者同士でコミュニケーションがとれるなどの内容である。

- ・地域の他の子どもたちや親同士のコミュニケーションが取れる。
- ・親子、地域のコミュニケーションを図ることができるいい機会になったと思う。
- ・普段あまり話さない保護者の方同士でお話ができる。
- ・地域とのつながりの場であったり、子どもと親のつながりを、遊びを通してもっと強く出来るのではないかと思った。
- ・このイベントを通して保護者の方に芸短の学生を見てもらうことで、これからの保育者にはこのような人達がいるのだと知ってもらうことが出来ると思う。

(4) 考察

アンケート結果をふまえ、本研究の目的(2) 子育て支援イベントが地域の子育て親子に果たす役割について、学生自身がどのように受け取っているのかに関わって重要な点を2つ指摘し、本イベントの教育的意義について検討したい。

1) 子ども理解・保護者理解

学生対象のアンケートでは、子どもにとっての意義として「遊びの広がり」と「発達の意義」が挙げられていた。本研究対象となった短期大学1年生は、入学後4ヶ月もたっていない中、子どもにおける遊びの重要性や「発達の意義」として「社会的発達」「身体的発達」「認知的発達」の3領域に着眼しており、大学での保育に関する専門的な学びを、本イベントでの実際的な体験と結びつけている様子がうかがえた。

保護者にとっての意義については、4カテゴリ「子ども理解の深まり」「子育てへのヒント」「安心できる時間と空間」「相談できる場」が見られ、前者2カテゴリは、保護者対象アンケートの「子ども理解の深まり」「子育てへのヒント」に対応する内容である。保護者アンケートと重なる記述が見られたことは、学生が保護者のニーズを読み取ることができていることのあらわれでもある。一方で、保護者アンケートには「子育てへのヒント」の内容はごくわずかで、「安心できる時間と空間」「相談できる場」に関してはほとんど見られなかった。そこで今後は、意図的に「子育てへのヒント」や「安心できる時間と空間」「相談できる場」を創出するための指導を計画していくことも重要であろう。

また、「親子に関する意義」が挙げられていることは、学生の「子ども理解」にとって重要である。というのも、学生が実習で体験するのは子どもとの関わりや援助であり、親子が関わる様子については、送迎時に垣間見る程度である。そのため、学生にとって本イベントが、子どもだけでなく、親子として観察できる貴重な機会となっているのである。

2) 子育て支援や地域連携に関する実際の学び

学生はまた、本イベントによって地域の子ども同士、保護者同士でコミュニケーションがとれるなど、地域交流の場として機能する点に着目していた。学生の中には、「保護者の方に芸短の学生を見てもらうことで、これからの保育者にはこのような人達がいるのだと知ってもらうことが出来る」という記述も見られ、自分自身も含めた地域とのつながりを実感できる体験となったことがうかがえる。こうした地域との連携・協働の体験は、学生が将来就職した先で、子育て支援や地域連携に取り組む上での貴重な実際の学びとなるであろう。

4. まとめと今後の課題

本研究では2つの目的、すなわち (1) 保育者養成校が主催する子育て支援イベント（あそびのひろば）の意義や配慮すべき事項（調査1）、(2) 子育て支援イベントが地域の親子に果たす役割について、学生自身がどのように受け取っているのか（調査2）について検討した。保護者と学生へのアンケートを通して、「あそびのひろば」が学生にとっての教育的意義だけでなく、子育て支援イベントとして様々な意義を有していることがうかがえた。このことは、保育者養成短期大学が、実践的な保育者養成機関としてだけでなく、地域の子育て支援機関として多大な可能性を有していることの証左といえよう。

そこで、今後の課題や研究の方向性として、3点挙げておきたい。第1に、本イベントに対する学生への意識づけである。本研究対象となった「あそびのひろば」は、新型コロナウイルス感染症が2023年5月に5類感染症に移行するプロセスで、急遽、日程など例年より大幅に変更して実施された。それゆえ、学生への指導や意識づけが十分ではなく、その教育的意義には一定の限界があった。また、学生のアンケート結果は、代表的な項目をピックアップしたもので、個々の学生がそれぞれの項目についてどの程度意識的に学んだかは今後の検討課題である。そこで、学生への事前・事後指導において、この「あそびのひろば」のもつ子育て支援の役割を意識づけることによって、イベントの教育的意義が深まり、その結果、学生の事後アンケートに表出される内容も質的な変化が期待できるであろう。

第2に、調査内容を精選することである。本研究のアンケートは、例年のイベントで使用しているもので、研究を主目的として作成されていない。たとえば、保護者へのアンケートにおいて「ご意見<良かった点>」として、自由度の高いものであったが、保護者の子ども理解の深まりや子育てのヒントにつながる項目を含めたり、「あそびのひろば」のようなイベントに保護者が期待することを調査することで、さらなる知見の蓄積が期待できる。

第3に、学生の保育者アイデンティティの発達⁹⁾をふまえて検討していくことである。本研究のようなイベントが学生の保育者としての発達過程にどのような意味があるのかを検討していくことで、保育者養成機関として、教育のさらなる充実につながると考えられる。

〈注および引用文献〉

- 1) 森下嘉昭・難波章人・浅井拓久也 (2024). 子育て支援イベントを通じた保育学生の力量向上——1・2年生の事後アンケート結果の比較から—— 山口芸術短期大学研究紀要, 56, 71-83.
- 2) 矢藤誠慈郎 (2022). 保育の質の向上及び子育て支援の充実に向けた取り組み 保育学研究, 60 (3), 5-9.
- 3) 中央教育審議会 (2015). 新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在

り方と今後の推進方策について（答申） 文部科学省

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365761.htm（参照 2023-12-19）

- 4) 平松紀代子（2013）. 保育者養成校における地域貢献としてのひろば事業に関する一研究 京都聖母女学院短期大学研究紀要, 42, 113-124.
- 5) 本研究のアンケートの作成・実施とデータ入力には森下が、データ分析は上村と森下が共同で担当し、論文全体の執筆を上村が担当した。
- 6) 川喜田二郎（1967）. 発想法——創造性開発のために—— 中央公論社
- 7) 前掲 1)
- 8) 前掲 6)
- 9) 石井美和（2021）. 子育て支援実践の形成・変容のプロセスを通じた保育者アイデンティティの再構築 保育学研究, 59 (1), 105-116.